OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	研究者になるということ ： 研究者と当事者のあいだで
Author(s)	小松原, 織香
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 44-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90067
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

特集２　第７回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけられる声を聴く）
テーマ「研究者になるということ：研究者と当事者のあいだで」

研究者になるということ
――研究者と当事者のあいだで――

小松原　織香

今日はみなさんに、私の経験をもとにして「当事者が研究者になる道のり」についてお話ししようと思います。私は性暴力サバイバーです。19 歳のときに被害を受けました。大学一年生の春でした。私の学問とのかかわりは、被害の記憶と切っても切り離せません。当事者であることが、研究者になることと深く繋がっているのです。

私は『当事者は嘘をつく』（筑摩書房、2022 年）という本を書きました。すでにお読みの方もいらっしゃるかもしれません。この本では、私は性暴力の被害経験、そこから今の私に至るまでの経緯を、物語仕立てにして描いています。構成は三部で、「性暴力編」「大学院編」「水俣編」になっています。

この本の主題は「嘘」です。性暴力と一般の暴力を比べると、難しい点は被害届を出しにくいことにあります。多くの性暴力が密室で行われるため、第三者による証言や物的証拠を残しにくいのです。そのため、性暴力の事実確認では本人の証言が重要な役割を果たします。ときに、性暴力被害者本人にとって、証言することは重圧となってのしかかります。私自身、性暴力被害を証言するときには、「私は嘘をついているのではないか」という不安に駆られてしまいます。

本の中ではその理由を四つ挙げました。一つ目は、耐え難い記憶であるため、防衛本能によって、無意識のうちに記憶が消えてしまっていることです。二つ目は、読者に性的な欲望を喚起することをできる限り避けたかったので、証言を編集していることです。三つ目は、本人にとっては確かに思えることも、脳の中で記憶が改変されている可能性があることです。四つ目は、いくら言語化しても、それが自分の体験とはぴったり重ならず、語り尽くせないからです。この四つによって、私は本当のことを言おうと試みても、「嘘をついているのではないか」という不安に襲われるのです。

私は、この自己懐疑を反転させ、あえて「嘘をつく」と宣言するタイトルをつけました。これは、世の中に溢れる性暴力の告発本につけられた「真実の告白」という陳腐なキャッチコピーに対するアンチテーゼでもあります。読者とともに「嘘かもしれない」という不安を抱えながら、私の見ていた風景を共有したいと思いました。この本の帯には「私の話を信じてほしい」というコピーが入っています。これは編集さんの提案です。私がこの本で言いたいことは「信じてほしい」という訴えだと感じた方もいらっしゃって、それは一つの解釈と

してはあり得ます。ただ、本人としては、読者に対して「あなたはそれでも私を信じるのか？」と迫るような、挑発的な態度だったなあと、今になって思います。

さて、私は本の中で、当事者から研究者へとアイデンティティを変更しています。私は、性暴力被害者の自助グループで、お互いの経験を分かち合う中で、被害者のアイデンティティを獲得しました。このなかでは、自他の境界線が曖昧になり、他者の記憶が自分の記憶と混じり合っていくような強烈な経験をしました。私が性暴力を語る言葉を獲得する過程では、仲間が必要だったのです。個人の自律性を手放すプロセスがここでは起きています。他方、私は大学院に進学し、研究者になることを目指します。ここでは再び、自己の輪郭を明確にし、個人の自律性を再構築しなければなりません。その中で私は、回復途上であることによる情緒不安定や、支援者から当事者への偏見のまなざし、自分自身の他人に無条件に「わかってほしい」と思ってしまう甘えなどに直面します。この頃の私は、当事者のアイデンティティを持っていることが足枷になっていると感じることもありました。

私の研究スタイルに対して、「当事者研究」だと思う人もいるかもしれません。でも、私は当事者研究とは線を引いてきました。私は当事者研究が個人モデルを採用していることに対し、社会モデルの視点から批判しています。一つ目に、私は当事者としてのアイデンティティを、自助グループを通して集団的に獲得しており、「個人の困りごと」を中心に考えていません。二つ目に、私は性暴力の問題は「傷ついた本人」ではなく、社会構造の側にあると考えています。三つ目に、支援者がドミナントな言説を占有し、当事者の語りを回復の言説に回収することに抵抗しています。私自身は、「青い芝の会」やウーマンリブなどの社会運動の歴史に影響を受けているため、問題があるのは当事者ではなく社会の側であると主張してきました。

他方、研究者としての自己確立は、「社会」ではなく「個人」、つまり私自身の内面的な問題でした。私が苦しんだのは研究者コミュニティへの不信です。研究論文は「査読」と呼ばれる審査システムがあります。私は査読を受けるたびに辛辣なコメントを受け取りましたが、そこには性暴力被害者への無知や偏見が含まれるように感じ、反発しました。同時に、自分自身の能力不足も思い知りました。言いたいことを学問のスタイルに落とし込んで書けなかったのです。

私はこの困難を思わぬ方法で突破しました。ケータイ小説を書いたのです。ケータイ小説の主な読者は十代、二十代の女性です。かれらも暴力や差別、アイデンティティの確立の問題に思い悩んでいましたし、たくさんの当事者がいました。私はかれらに自分の小説を読んでもらうために試行錯誤をしました。私は二点に気づきました。一つ目は、文章は読み手に向かって書かなければならないことです。スタイルに沿った記述でわかりやすく書く必要がありました。二つ目は、良い文章は相手に伝わります。書き手は読者を信頼しなければなりません。そして、この二つは論文を書く際にも気をつけなければならないことでした。私はケータイ小説を書くことで、論文を書くための基本的な技術を習得したのです。

次の転機は、水俣地域の研究を始めたことで訪れました。私は水俣病の患者さんたちの記

録や手記と向き合う中で「かれらの痛みがわからない」ということに戸惑います。言葉ではわかっても、心が共振していません。それまで、性暴力被害者同士ではテレパシーのように痛みを共有できる感覚があったので、私は超能力を失ってしまったような気持ちになりました。

ところが、水俣で暮らしている人たちと定期的に関わるようになると、だんだんと地域の人間関係などに巻き込まれていきます。とにかく縁があるので、そのままずるずると水俣の研究を続けることになりました。そのうち、「わからなくてもそこにいること」が大事だと思うようになりました。そして、そのまま何十年も水俣で暮らしている「支援者」と呼ばれている人たちは、どこか「当事者」のようでもあり、境目がわからなくなっていきました。

さらに、水俣病被害者の緒方正人さんとの出会いがありました。ある座談会で、緒方さんは、当事者が支援者に対して「あなたにはわからない」ということは「傲慢だ」と言い放ちました。その場にいた私はちょっとびっくりしました。緒方さんは当事者として苦しみ抜いた人であり、ずっと水俣病の問題に向き合ってきた人です。緒方さんが「あなたにはわからない」と言っても、全然おかしくはありません。なので、私にとって緒方さんの言葉は予想外で、「そんなこと言う人もいるのだなあ」と面白く思いました。そのとき「当事者の世界は深い。私の当事者人生もまだまだ続くんだな」という希望のようなものを得ました。

私が水俣で得たものは「時間軸の発見」です。水俣の社会運動史を振り返れば、初期は「怨」の旗を掲げていた当事者が、のちには「祈り」の活動に参加するようになります。大事なのは、発展論で捉えることではなく、「どの時代にもそういう人がいること」と「時代によって光が当たるところが変わること」です。どちらも必要な運動なのです。

私は 2000 年代に性暴力被害者として活動をしました。そのときには、対話や赦しのテーマはほとんど受け入れられませんでした。でも、今振り返ってみれば、当時は被害者が怒りを発露し、厳罰化の要求をすることが必要でした。私は時代に合わないことをやっていたのです。いつも時代は流れており、いつを生きるのかを人は選ぶことができません。そのときの自己の最善を尽くすしかないのです。それは、時代の制約という限界を意味します。次の世代は、私の思いつかない全く違う行動をとるかもしれません。そのことを受け入れるためにも、私は世代交代を視野に入れて、証言という行為を捉えるようになりました。

さて、ここから先は、私が本を出版した「その後」のことを少しだけお話ししようと思います。まず、私にやってきたのは「第二次カムアウト・ハイ」でした。カムアウト・ハイとは自分の経験を語ることによって、本当はしんどいのに、やたらと元気になってなんでも話してしまう状態のことを指します。自分がコントロール不能になるということでもあります。私は、すでに性暴力経験については身近な人にカミングアウト済みだったので、この本では 2 回目のカムアウト・ハイを味わうことになりました。

本を出すということは、私を知らない第三者が私の被害経験を知っていることになります。もしかすると、性的な行為を含む妄想を膨らませたひともいるかもしれません。他方、こちらは相手が本を読んだかどうかもわかりません。それは居心地の悪いものです。でも、

大変なのはこの「しんどさ」を認めることです。「強い自分でいたい」というプライド、「乗り越えていない、と言われるのではないか」という支援者への恐怖が、「大丈夫」だと言いたい気持ちにさせます。そんなとき助けてくれたのは、やはり仲間でした。当事者である友人たちが気遣ってくれて、私は意識的に「今、しんどいのだ」と口にするように心がけました。

加えて、私が直面したのはマスコミの取材の難しさです。ある新聞社の記者の原稿では、私の言葉はつまんで繋ぎ合わされ、発言が作り替えられていました。「傷ついた被害者が社会を変えるために立ち上がる」というストーリーになっているのです。私は、自分は入れ替え可能な「性暴力被害者」のうちの一人であって、生身の人間として見られていないのだと感じました。そして、「それこそを本で批判してきたのに」という虚無感に苛まされました。私は懸命に原稿を修正しました。その記事は公開され、高い評価を得ました。でも、それは記者のお手柄であり、私の葛藤も努力もなかったことになっています。

さらに、この取材のあと、私は自分の中にある「打ちのめされた」という感情を、どう扱えばいいのか良いのかわかりませんでした。私は研究者としては「語り」の扱いには慣れています。適切な要約、編集、解釈などについては議論可能です。記者と書き換えの要望を伝えて交渉することもできるでしょう。それなのに当事者としては、深く傷つき、精神的に消耗し、「私の言葉は伝わらないのだ」という人間不信に陥りました。取材を受けたことに対する自責の念にも駆られました。ここでも仲間が支えてくれました。一緒に記者の態度に対して怒り、私が「傷ついてしまった」ことに恥ずかしさを覚えることも理解してくれました。この経験を通して、私は研究者の仮面をつければ冷静に振る舞えることでも、当事者としては脆く、取り乱してしまうことを改めて思い知りました。

私は当事者と研究者の二重アイデンティティについて考えるようになりました。私の場合、研究者としての自己は、独立した別人格のようにして確立されました。そうなった理由の一つは、今の初期キャリア研究者の置かれる厳しい状況もあると思います。業績のためには当事者としての自分を切り捨てて、仕事に集中しなければなりませんでした。また、非常勤講師として働き始めましたが、教員として学生に見せる顔は、当事者の私とは異なる表情をしています。皮肉なことに、この自己切断のようなアイデンティティの形成によって、私は生きるのが楽になりました。研究者としての私は、社交的で積極的ですし、同世代の仲間とプロジェクトを進めていくことを楽しんでいます。当事者の自分の領域を縮小することで精神的には安定しましたし、研究者としての自信を持つことができました。

だからこそ、いま、もう一度、自分の二重アイデンティティについて再検討しています。私は「当事者だから当事者研究すればいい」というのは、あまりにも安易な考えだと思っています。でも、当事者でありつつ研究するスタイルには、二重アイデンティティだからこそ見えてくるものもあるかもしれません。はたして、客観的・中立的なアカデミアの学問と、当事者の知の探求の統合は可能なのでしょうか。そんな疑問も湧いてきます。どちらにせよ、当事者が自分のことを研究しても、しなくても良いというベースラインは引いておく必要

はあります。誰にも押し付けられず、奪われない形で当事者が研究していく道が、これからもっともっと拓かれていくかもしれない。そんな希望を私は抱いています。

（こまつばら・おりか）